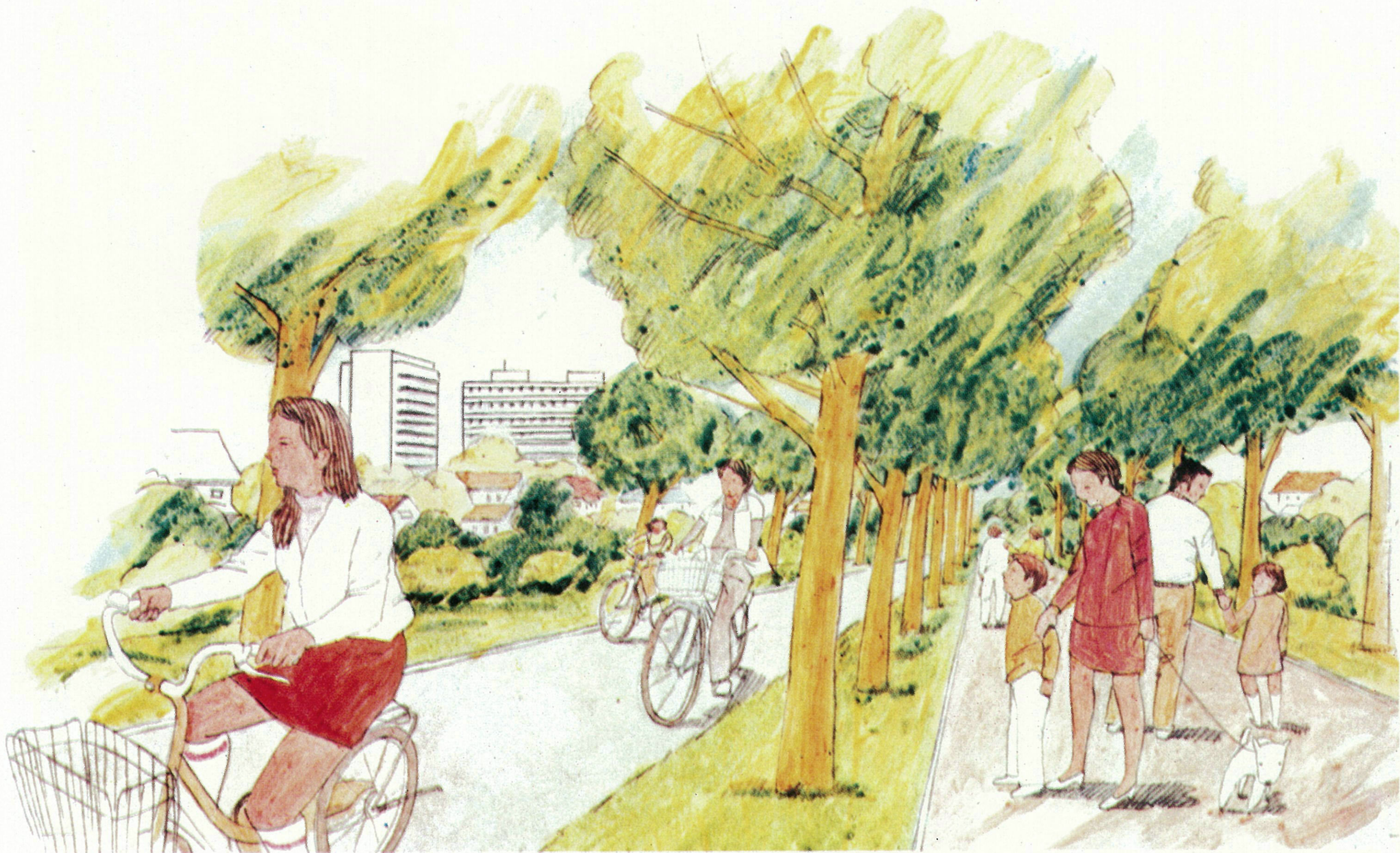


完全に無公害な街づくり

日差しと木立ちと浜風と



完全無公害都市を

新しい街は、旧い街の環境改善に役立つものでなければなりません。新しい街が生まれることによって、伝統ある芦屋が、豊かな人間性と格調高い文化をより一層高めるものでなければなりません。

それには、日差しと木立ちと浜風の街、あらゆる点で完全に無公害な街を建設することが必要です。

六甲の山並みを背につくられる新しい海辺の街を、今の芦屋の街と同じように暖かい心でめぐんでください。

兵庫県知事 坂井時忠

海に広がる芦屋

高校野球の熱戦が展開された甲子園球場の約三十倍の広さ、これが芦屋浜の埋立地です。ここではすでに下水処理場が稼働しており、また新清掃工場の建設にも着手しますが、いよいよこの新しい土地で、海に広がる芦屋のまちづくりにとりかかるのも遠くはありません。

そこで私は、芦屋市全体の機能と、そこに住む人たちがうまく融和できるまちづくりを進めたいと思います。夢のようだった構想が実現する具体的内容を本紙でご理解願えれば幸いです。

芦屋市長 渡辺万太郎

計画の趣旨

新しい住宅街をつくるために、昭和四十四年から芦屋地先で進めてきた埋立て工事がほぼ終わり、街づくりが本番を迎えるばかりとなりました。

この事業は、大阪湾広域港湾計画に基づく阪神港整備の一環として進めているもので、海を埋立てて住宅街を造るのは全国的にまれな構想です。

二万人の新しい街

新しい大地に生まれる新しい街は、面積約百二十六ヘクタール(約三十八万坪)、住宅六千戸、人口およそ二万人。国際文化住宅都市の「芦屋」にふさわしいニュータウンづくりです。

全面積のおよそ半分を住宅用地と教育施設にあて、残りの半分は公園・緑道・センター施設・商業施設・衛生施設・誘致施設を設けます。

タウンの中央部は、高層住宅ゾーンです。限られた土地を有効に使うためには、どうしても上に伸びねばなりません。この新しい街にも高層住宅を建てますが、良好な住環境の創造をめざして「工業化工法による芦屋浜高層住宅プロジェクト提案競技」を行ない、現代の技術を結集した全く新しい姿の街にすることにしました。

そのため、タウン全体の人口密度は、一ヘクタール百六十人と現在の芦屋市よりもいくらか高い数字を示しますが、高層ゾーンのために、大地は、ゆったりとしています。

高層ゾーンのまわりは、中・低層の住宅街です。

住宅街を縫う道路は、バスが

走る幅十八メートルの幹線道路と散策用の緑道。歩道と自転車道は並行して設けます。そしてすべての道は、木立ちで包みます。

公園は全部で十一カ所。地区公園、近隣公園、児童公園など十八カ所あまりになります。海のそばの街ですから、水を生かしたシーサイドパークも設けます。

くまなくふりそそぐ太陽の恵み、緑の木々を渡る浜風—人間の生活環境を維持するために安全で健康で快適な住環境を構成することが基本です。

さらに、新しい土地をつくるのですから、そこには、よそに誇れる新しい医療研究機関を設け、二十一世紀に引継いでいく計画なのです。

芦屋の改創も

いま、兵庫県の都市部では、過密の問題に悩まされていますが、芦屋市も例外ではありません。戦後の急速な経済の高度成長政策の過程のなかで、大都市とその周辺都市に生じた人口の過密化。住宅都市としての歴史を誇ってきた「芦屋」も、その過密化の波をかぶり、昭和三十年代後半からのマンション化現象、さらに、学校・公園など文化教育施設の不足、購買施設の不足、生活道路の交通量増加などの問題が生まれてきました。

そして、国鉄芦屋駅前の再開発とか、住宅環境悪化地域の改良など、新しい町づくりが必要になりました。

そこで、このシーサイドタウンが、芦屋市の都市の改創の担い手として浮かびあがり、既成市街地の環境整備とにらみ合わせながら建設を進めることになったのです。

阪神港の整備計画

大阪湾沿いに位置する尼崎、西宮、芦屋港の三つの港区をまとめて一般に「阪神港」と呼んでいます。

この「阪神港」の整備は、大阪湾広域港湾計画に基づいて進めているもので、東の大阪港、西の神戸港の中間に位置する「阪神港」の整備は背後都市との調和を図りながら、都市活動に必要な流通施設、住宅、レクリエーション施設を整備するのがねらいです。

計画が話題にのぼりはじめたのは、昭和三十三年ごろのことです。以来、各関係機関で検討され、四十一年八月の県勢振興計画に盛り込まれました。四十二年八月の港湾審議会が概要が固まり、県はその趣旨に基づき整備事業を四十二年度から本格化しました。

その後、芦屋市が持つべき構想を全体計画の中に組み入れながら、将来像を阪神港利用計画委員会に諮問するなどして、四十八年七月、臨海埋立て地の開発方針と利用構想をまとめました。

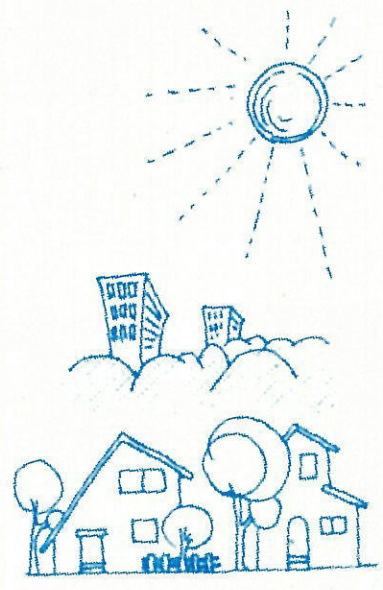
芦屋港区については、品位と風格をもつ住宅都市の一部として開発し、既成市街地の都市環境整備のための事業用地の交換用地などにも活用するという方針をたて、埋立て事業を進めています。

人が住む しあわせが 芽生える

計画のなかみ

国際文化住宅都市の歴史を生かし、緑ゆたかな美しいまちづくりをめざす「芦屋」に生まれる新しい街——そこに住む人たちがしあわせを生む街——何度も訪れたくなるような街——。

そんな新しい街を紹介します。



日ざしの中の住宅

明るい部屋、ゆとりある住まいは、心をなごませ、家庭のなかに笑いが生まれます。

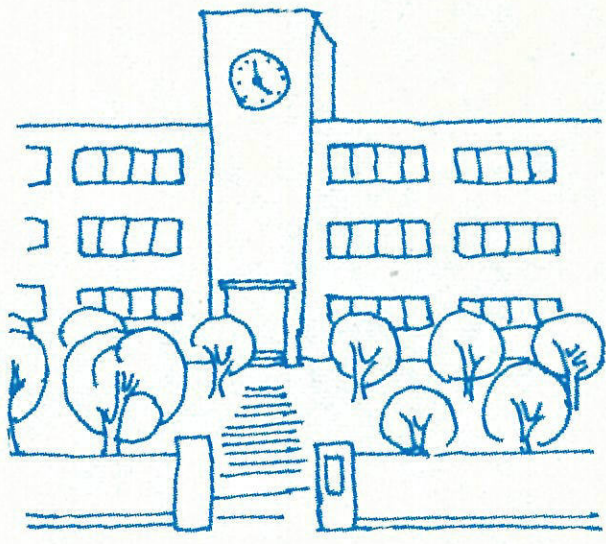
住宅群の間には、緑の空間をたくさんとって、伸びやかな暮らしの維持に努めました。

タウンの中央部には宮川をはさんで高層住宅を建て、そこからタウンの周縁に向かって次第に低い家を建て盛りあがるような街並みをつくりまします。

おもな間取りは、2LDK、3LDKですが、民間住宅には4LDKもつくる計画です。

住宅用地は五十六・五^〇。全体の約四四^〇をあてます。

住宅の建設は約六千戸。賃貸



安全通学の教育施設

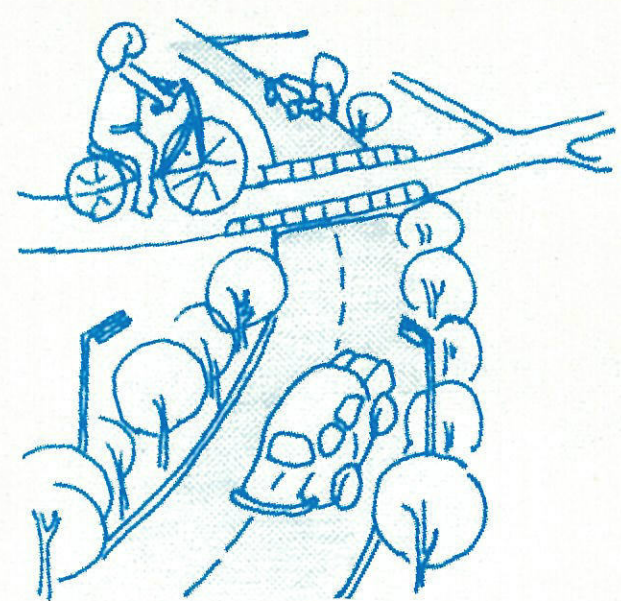
学校や保育所も、新しい街には欠かせません。

安全に通学できる学校、施設の整った学校が必要です。また、共働きの人たちのための保育所、幼児教育の場となる幼稚園も、コミュニティの中に必要な施設なのです。

新しい街には、このようなことも考えて保育所二カ所、幼稚園四カ所、小学校二校を住宅地区の中央部にバランスよく配置する予定です。

また、町の南端に中学校一校、市街地とつながる所に高等学校を一校建設し、安心して子供たちが教育を受けられるように考えています。

この高校は、阪神間の高校不足解消の一助にもなるよう配慮しているもので、まだ具体的な計画は決めていませんが、用地を確保し、建設体制を整えています。



木立ちの中の道路

安全で快適な道づくりをタウン内で試みました。しかも、木陰あふれる道づくりです。

歩車道をわけた十八^〇の幹線道路を設け、バスを走らせて市街地に連絡します。

また、車で既成市街地へ行くには、いったん海岸沿いの防潮堤線に出て、そこから四本の市道、稲荷山線、中央線、松浜線、宮川線を通って市街地に出る方法をとり、住宅に関係のない通過交通を避けるように路線計画を決めています。

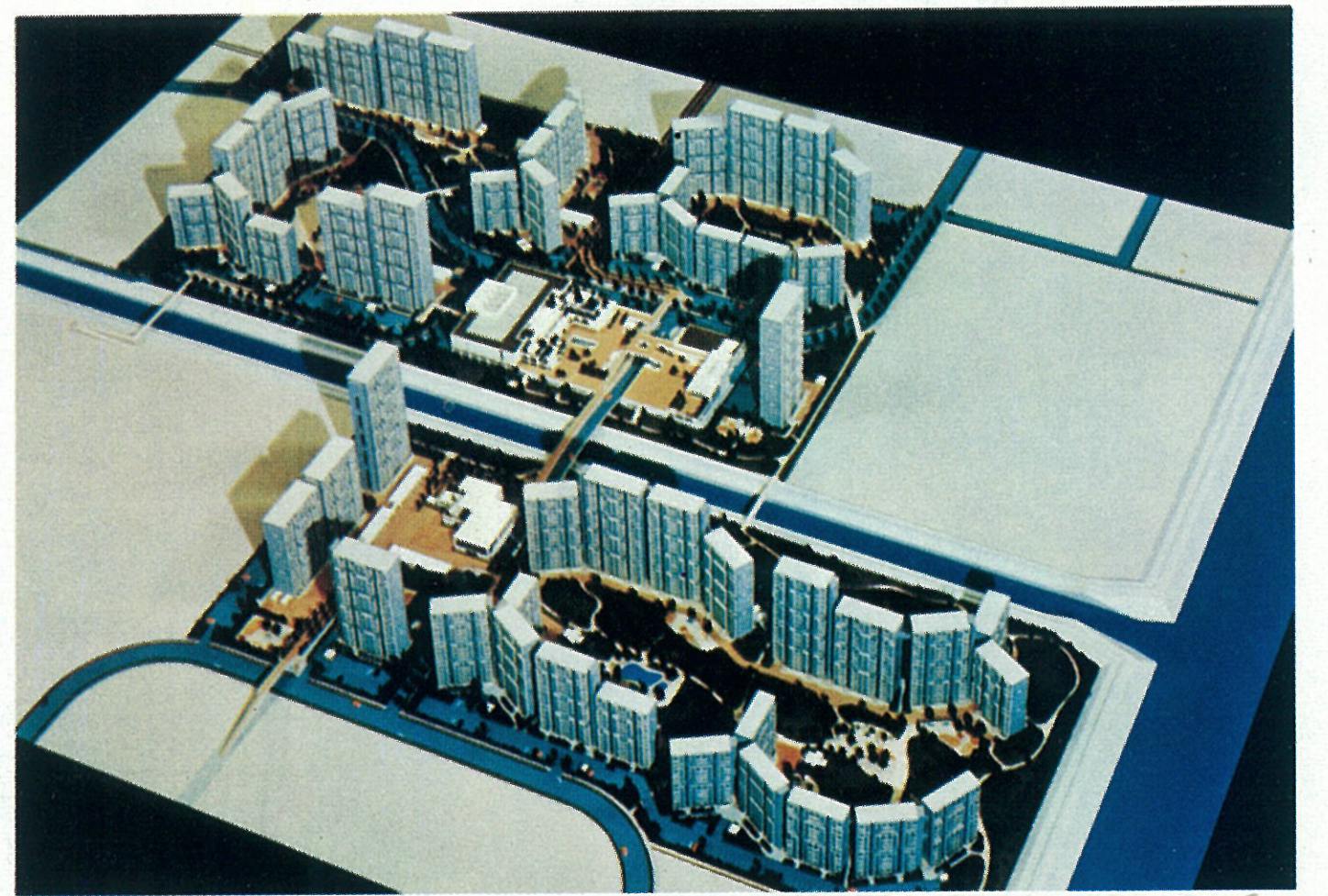
さらに、住宅内の連絡道として、両側を木立ちでくるんだ緑道を設け、そのなかを歩行者道と自転車道とにわけます。この道は、安全な通学に、おかささんの買い物に、休日の散策に、またサイクリングコースとして緑に親しみながら利用できます。



丘のある公園

住まいの近くに、花と木立ちに囲まれた公園があれば、生活にうるおいが生まれます。

ニュータウンには、いたる所に公園がみられ、丘のある公園には木々の緑があふれます。



中央部に高層ゾーン

シーサイドタウンの中央部二十・三^〇（全体の一六^〇）が高層住宅ゾーンで、地域の核にあたります。

住宅は十四階以上のものを五十二棟建て、県営の賃貸住宅六百戸、県住宅供給公社の賃貸住宅六百戸、日本住宅公団分譲住宅千六百戸、民間住宅六百戸の合計三千四百戸を設ける計画です。

ゾーンの中央、宮川の東に、消防署、郵便局、集会所などの公共施設や、スーパーストア、銀行などの商業施設、医療機関をつくり、宮川の西にはスポーツセンターを設けます。

新しい試みとしては、各住棟に五階をひとつくざりにした共用階を設定して幼児の遊び場、日なたぼっこ場、防災のミニ拠点にしたことのほか、真空収集方式によるゴミ処理とか、地域暖房、給湯システム、建設主体の異なる住棟の混合配置計画などをとりいれています。

勤め先から帰り、夕食までのひととき、暮れなずむ夕陽のベンチにかけて、はしゃぐ子供たちを目で追いながら、もろもろの煩わしさに疲れた心をいやすのも、また明日への原動力となるでしょう。

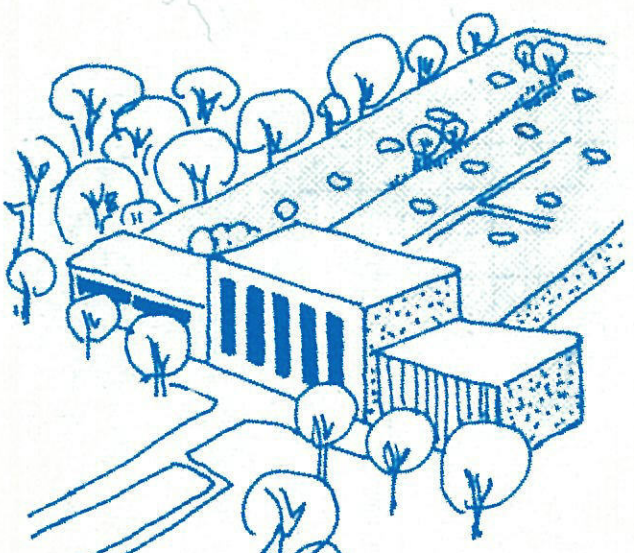
公園の種類も豊富で、地区公園一カ所、児童公園八カ所、近隣公園二カ所の計十一公園を設けます。

面積は、十・六^〇で、全体の約八^〇です。

特に、最近、新しい団地ができて、団地の人と昔からそこに住んでいる人とのあいだに疎外感が生まれるという問題がありますので、地区公園は、宮川の西沿いに市街地と隣あうところに設け、いまの市民と新しい市民とのあいだにコミュニケーションの場が持てるように考えています。

児童公園は、川の東西にそれぞれ四カ所、近隣公園は、それぞれ一カ所設けて、子供たちが

交通事故の魔手から逃れ、住いのすぐそばで、楽しく安心して遊べるようにします。



無公害の下水とゴミ処理

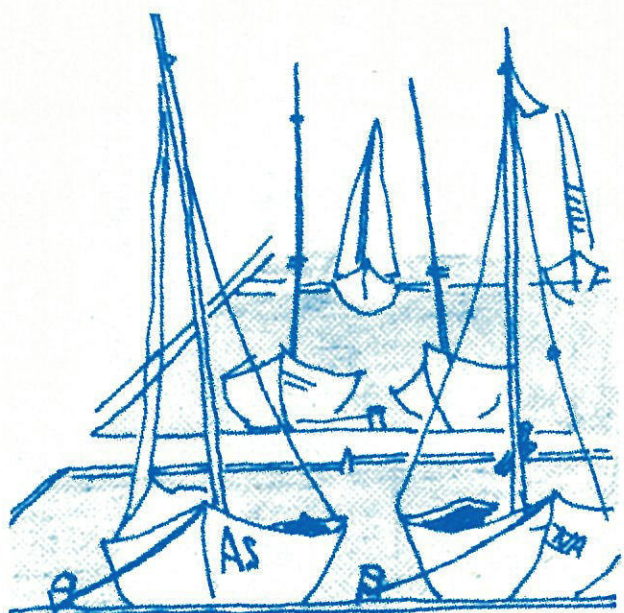
人のくらしには廃棄物がつきものです。生理上のそれも、物理上のそれも、適切に処理しなければ、快適な生活環境は望めません。

宮川の西、地区公園の隣に下水処理場をつくり、快適な生活への第一の布石とします。

この施設は、十二万五千人を対象とするもので、芦屋市全体の環境づくりに役立て、施設の屋上は公園化してタウンの憩いの場とします。

また、タウンの東南端にじんあい処理場をつくりまします。現在打出浜にある処理場は、機能が落ちており、付近から苦情も出ていますので、市街地からもっとも遠いこの場所へ移すものです。施設は、タウン内への影響が少なくなるよう、新しい機能を備えたものを計画しています。

この二つの施設は、あわせて五・一^〇、全体の四^〇にあたりまします。



憩いの海浜公園

新しい大地を生かして芦屋市の長年の構想が実現するのです。

コンペ

省略して一般的には「コンペ」と呼ばれていますが、正式には「工業化手法による芦屋浜高層住宅プロジェクト提案競技」といいます。

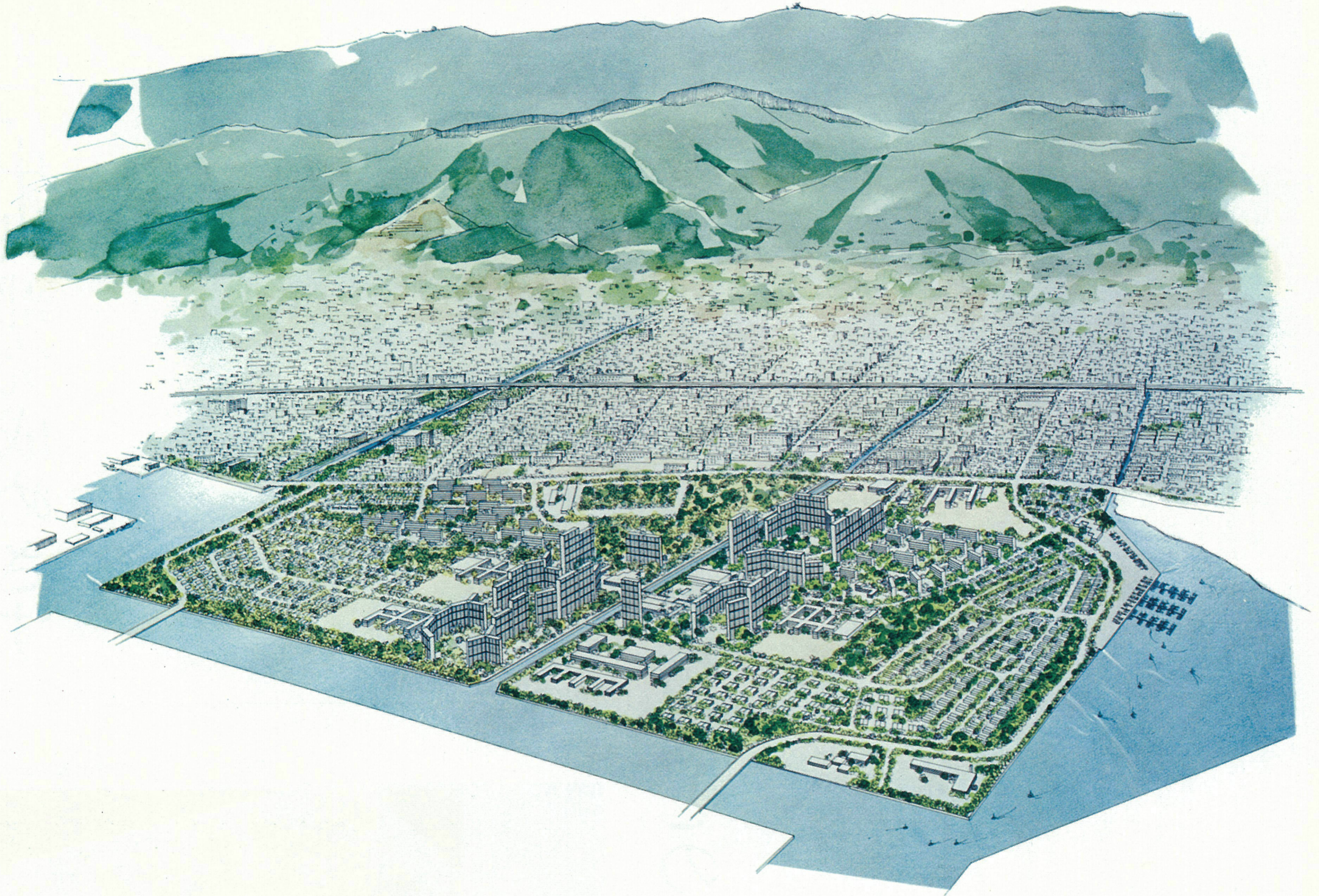
これは、シーサイドタウン芦屋浜の中央部に高層住宅群をつくる場合、どのようなものにしたらよいか、ということと、建設省、兵庫県、芦屋市、日本住宅公団、兵庫県住宅供給公社、日本建築センターがその建設計画を公募したものです。競技は「良質で適正な価格の高層住宅の開発」「高層住宅団地における良好な環境の整備」の二つをテーマにし、さらに住宅と生活関連諸施設について、その規模、価格、生産方式、販売、維持管理までを含めて行ないました。

二十二グループから選ばれた二十五の提案を審査した結果、ASTM（アステム）グループ（新日本製鉄、竹中工務店、松下電工、松下興産、高砂熱学工業）の提案が第一位に入選しましたので、その案を実施する方針です。

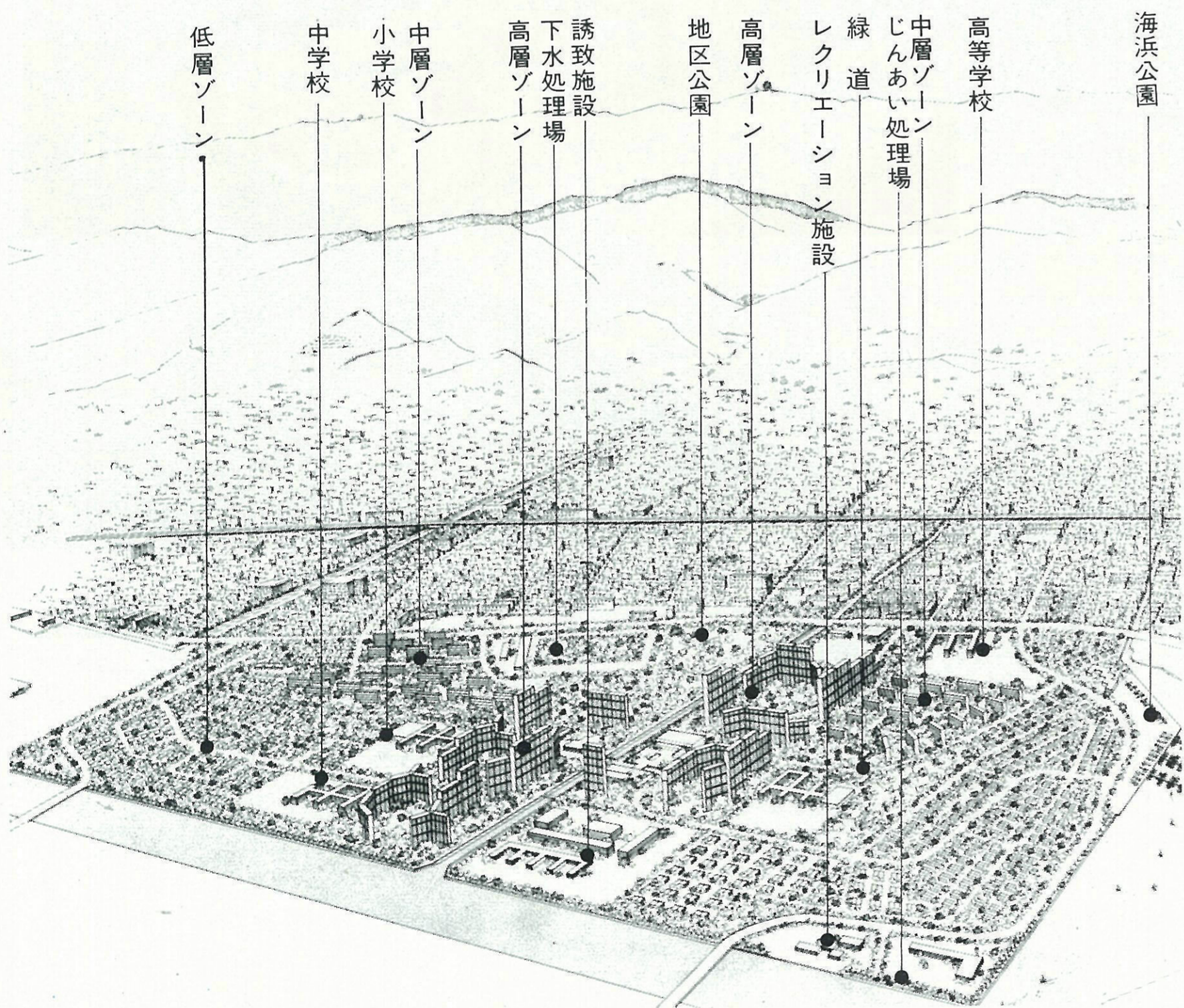
なお、このコンペは、住宅・都市計画についての国際会議の主要テーマとして取りあげられており、世界の注目を集めています。

コミュニティづくり

新しい土地に新しい街が生まれ、人が住みつく。そうなること必然的にコミュニティが生まれます。しかし、それが形だけのものであつてはならないと考えます。暖い心のふれあう、連帯



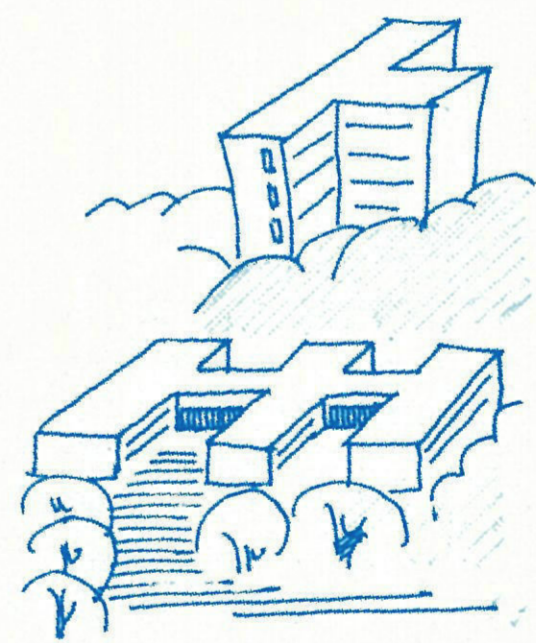
新しい街のイメージ (上図・下図)



海浜公園
 高等学校
 中層ゾーン
 じんあい処理場
 緑道
 レクリエーション施設
 高層ゾーン
 地区公園
 誘致施設
 下水処理場
 高層ゾーン
 中層ゾーン
 小学校
 中学校
 低層ゾーン

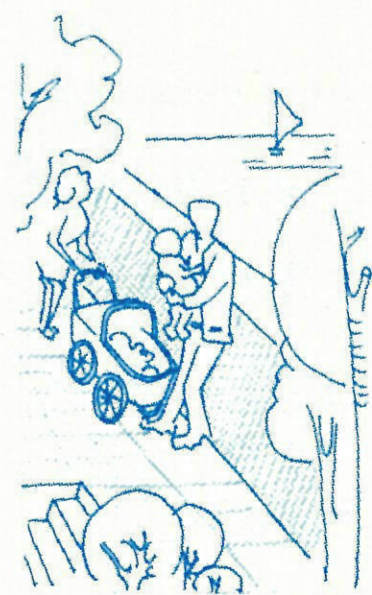
東部海岸線の三角地帯には、シーサイドパークやヨットハーバーをつくって、埋立て前の芦屋の浜・打出の浜の海の想い出を生かします。

また、沖地区との間の水路百五十回は、レガッタコースにする計画です。



モニュメントに誘致施設

五十二年春にオープンさせる予定で、建設準備協議会を設けるセンターの基本構想を練っているところだ。



万全の護岸

タウンの南端、宮川の東に、新しい大地の誕生を祝って、タウンのモニュメントとなるような施設を考えています。

現在計画していますのは、成人病の高度な診断と治療、研究や中高年健康増進指導などについての専門機能をもつ成人病セ

三方が海の街ですから、護岸工事には、十分手をつくしました。たよらない護岸では、人災を招きかねません。

基礎は、置換工法を主体にしてしっかりと固め、高潮についても大阪湾内で行なわれている高潮対策に合わせています。

しかし、海との絶縁は避けました。住区を取巻く外周護岸に海浜グリーンベルトを敷き、みんなが水辺に親しめるような散策道をつくりまします。

感豊かなものでなければならぬでしょう。

シーサイドタウン芦屋浜はこれから生まれる新しい街なので、将来をみとおして、望ましいコミュニティづくりを進めるため、日常生活で人と人との触れ合いの場をたくさんつくりまします。

とりわけ、高層住宅の建ち並ぶ中央部はコミュニティ不毛地帯と一般にいわれる高層集合住宅団地にあたりまします。そのため、とくに念入りな検討を加え、およそ六百戸を単位にひとつの集会所、ひとつの公園をはりつけ、コミュニティの核にしました。『セミパブリック』もそのための空間で、屋外では、住居棟の回りのおしゃべり広場、ブロックごとの少年公園、児童公園プレイロット、そしてその一角に『山と大地の広場』を象徴するテーマ広場を設けます。また、屋内には、各棟の五層がひとつのブロックを形づくるような共用階を設けます。

共用階は人工庭園ともいえるもので、子どもが三輪車を乗り回したり、積木で遊んだりできる広場にします。もちろん、おとなたちが歓談のひとつときを過す場にもなります。

また、高層ゾーンの回りの住宅地には、近隣公園を二つと児童公園を八つ設けます。

シーサイドタウンに隣接する現市街地との交流も、コミュニティづくりには大切なことです。そのため、中央部のショッピング施設、スポーツ施設の周辺をはじめ、全体を通じて、タウンの外から訪れる人々を受け入れ、タウンの人たちと交歓できるように十分なスペースを設けています。

52年に中央部完成めざす

建設のすすめ方

シーサイドタウンの用地造成は、宮川から西の第一工区をすませ、東部第二工区を埋立て中です。工事は順調で、来春には、第二工区を終えて、第一工区に表土を入れる二次造成をはじめます。宅地造成が進むといよいよタウンの建設が本格的になります。

しかし、工事の契約がすすんでいないので住宅の分譲価格や家賃が決まっていないとか、用地を確保している高等学校も高増設計画が確定していないので、建設年次がまだ決まらないことなど、まだまだの部分も多いのです。

ことし四月現在のスケジュール案のあらましは下表のとおりで、おおもとになる基本計画はほぼまとまり、いまは基本設計と実施設計の段階です。全体の完成は五十七年春をメドにしています。

これからのスケジュール

昭和49年	第1工区埋立て完了 第1工区測量開始 コンペ地区地盤改良着手
50年	第2工区埋立て完了 植栽開始 教育施設建設開始
51年	誘致施設着工
52年	コンペ地区完成 公共施設、商業施設、教育施設、医療施設完成 中・低層ゾーン着工
.....
57年	全事業完成

討を続けています。

また、調査段階を一步進めた樹木の植栽実験、稲荷山線の建設工事、上・下水道、電気、ガス、電話の敷設工事なども前後して始める予定です。

地元説明会も市と協議して開く予定です。

そして、五十年秋から公園、教育施設などの建設にかけ、五十一年には誘致施設に着工します。

中央部高層ゾーンの完成は五十二年の春になります。そのときには中学校、小学校各一校、幼稚園二園、保育所二カ所も完成させる手はずです。ゾーン内につくる公共施設、医療機関、商業施設もオープンします。住宅建設のペースにあわせて生活環境を整えていく計画なのです。

高層ゾーンを取りまく形で配置する中・低層ゾーンは、いまのところ、高層ゾーンをつくりあげてから着工する考えです。

そうした建設と併行して、区内道路、児童公園、近隣公園、地区公園など、環境づくりを進

めます。残りの小学校、幼稚園、サブセンターなどはタウン完成に間に合うよう五十四年から建設にかけ、それまでには高校の建設もメドがつく見込みです。

現市街地との調和はかる

市民の声を反映

シーサイドタウン芦屋浜の開発計画は、芦屋市の「緑ゆたかな美しいまちづくり条例」などをふまえながら練りあげられています。またすでにいくつもの要望や意見も示されており、そうした声にこたえ、さらには現市街地と調和するよう、ただいま調整中です。

市民の声として市からだされた要望・意見を並べてみますと――

▽芦屋市への換地用地提供

芦屋市から県へ、既成市街地整備のための換地用地を造成地内に確保するようにとの要望がありましたが、県は、開発計画の趣旨に添うことなので、確保することにし、詳細について市

と協議しています。

▽市財政への配慮

芦屋市から県へ、この事業にもなつて急増する関連公共事業で市財政を圧迫しないようにとの要望がありましたので、県はその趣旨に添い、公共施設等の整備のための長期低利特別融資を導入しながら事業を進めていく方針です。

▽小口住宅地分譲

低層ゾーンの住宅地を小口分譲してほしいとの要望があり、いま検討中ですが、タウン全体の土地利用計画を決めるとき、要望に添えるよう努力します。

▽公営住宅の優先入居

芦屋市から県へ、県営住宅に市民が優先的に入居できるように配慮してほしいとの要望がありましたので、その要望に添える

よう検討を進めています。

▽肢体不自由児の施設

肢体不自由児のための住宅つき生涯学級を設けることについて高層ゾーン内で検討しましたが、住棟の構造と平面計画の面でいろいろ問題がありますので埋立て地内のほかの住宅群の計画ともあわせ、市と県とでさらに協議を進めます。

▽高層住宅の安全性

現代の建築技術が、埋立て地上の高層住宅を可能にしました。この芦屋浜の場合でも、関東大震災以上の地震にも耐えられる安全性をもっています。さらに、災害時のパニックを防ぐため、避難用エレベーターや防災ミニ拠点をつくるなどの配慮をしています。

昭和49年3月9日の芦屋浜埋立て地



MEMO

この広報紙は芦屋浜開発計画の概要をまとめたものです。文中で使った“シーサイドタウン芦屋浜”は仮りの名です。すてきな愛称をつけてください。

兵庫県は、このほか、新しい住宅団地の建設と取り組んでいます。住みよい街づくりのために、すばらしいご意見やアイデアをお寄せください。